



# 教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1994 発行所 財団法人精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町1-2-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

## 聖母マリア

### 恩寵・信仰・救い

(イタリアのロレトの聖堂には、聖母マリアが大使ガブリエルから神のみことばが人となってお生まれになるといってお告げを受けた、と伝えられる家が残っています。この聖なる家への信心七百年を記念して、教皇様は手紙をお送りになり、救いの歴史の中で、また個々のキリスト信者とその家族たちの霊的生活の中で聖母の果す役割について述べられました。)

(…) 託身の秘義が成就される瞬間というのが、いくつもありました。そこには、ロレトの聖堂が守り伝え、全教会に訴える偉大なメッセージが見られます。まず、天使の挨拶(お告げ)。そして信仰に満ちたマリアの返答「なれかし」。最後に、みことばが肉体となられる至高の出来事です。これらを要約すれば、恩寵、信

仰、救いという三つの言葉に替えることができるでしょう。使徒パウロは同じ言葉を使ってキリスト信者の秘義を説明しています。「あなたたちはその恩寵により、信仰によって救われた。」お告げの祈りの中で回想するこの三つの瞬間に、キリスト信者の敬虔さが賞嘆すべき姿で表れています。その内容から言って、ロレトの祈り(お告げの祈り)は特筆すべきすばらしいものです。「主の天使はマリアに告げた…、私は主のはためです…、そしてみことばは人となられた。」

#### 神とのつながりは無償の賜

「恩寵に満ちた方」(ケカリトメネ)というすばらしい呼びかけで頂点に達するお告げの出来事は、そもそも神と被造物との関わり

り合いというものが、神の自由で崇高な選びによる無償の賜であることを、基本的な事実として明らかに示しています。聖書では、全てが「恩寵」という言葉に含まれます。マリアの偉大さは結局のところ、神の恩寵によるのです。マリアに続いてその浄配ヨセフ、そして全教会もまた然りです。マリアの受けた恩寵は、神のご好意による意図的な命令と云うにとどまらず、現実のもの、マリアの御子の死による功德を通じて、前もって与えられたものと言えます。つまりそれは聖霊そのものなのです。従って、マリアを「恩寵に満ちた方」と呼ぶことは、とりもなおさず聖霊に満ちた方と云うに等しいのです。

ロレトの聖なる家には、今も「めでたし、聖寵満ちみてるマリア」がこだましているようです。そこは言わば、恩寵について思いをひそめるのみならず、恩寵を受けることができる恵まれた場所、秘跡を通して恩寵を増し、あるいは失った恩寵を取り戻すことができる場所として現在に至っています。

## 司祭の条件

新たな福音宣教が実を結ぶためには、修徳と内的規律、そして犠牲と自己否定の精神を身に付けた司祭たちが必要です。(「パス・トールレス・ダボ・ヴォビス」48番)

利己主義と放縦に蝕まれた文化にあつては、特にこのような不可欠の徳質に注意を払いつつ、霊的形成を行うべきです。

役務としての司祭職は、消えない永遠の印を人間のうちにしるしです。(前掲書70番参照) それは、俗に言う職業や「キャリア」ではありません。ある種の俗っぽいものではありません。

託身の秘義における第二の瞬間は、前述のとおり「なれかし」すなわち信仰です。「私は主のはためです。あなたのみことばのとおりになりますように。」(ルカ1・38) エリザベトが、マリアは信じたから「幸いな方」だと称えた(ルカ1・45参照)のは、このことです。第二バチカン公会議は、神の御母の真の偉大さがその特権にではなく信仰にあることを教えています。マリアは新約の最初の信奉者であり、「信仰の旅路を進んだ」(教会憲章、58番)人です。感謝を捧げましょう。マリ

さ、金銭に関する過度の関心、世間から「退く」ことに対する世俗的な態度などが、聖霊に生かされた内的生活から生まれる真の司牧愛が育つのを妨げる要因となっています。(同19番参照) 司祭も司教も共に、これらの必要とそれに付随する困難に立ち向かわなければなりません。同様に、司祭を助けて兄弟的な支えや霊的成長の機会を与え、使命への熱意をよみがえらせることを目的とする種々の会は、奨励に値します。(九三・六・八)

アは、聖アウグスチヌスによれば、キリストを「胎内にみごもる前に、心に受け入れた」(説教215.4 PL 38 1074)のです。

こうして聖なる家の中にこだまするメッセージの二番目は、信仰についてです。ロレトでは、人はマリアの信仰に感化されたかのようになり、啓示された真理に頭で同意するのみならず服従し、自らの生活の中に喜んで神を受け入れ、神のご計画に心から、寛大な「はい」という返事をさし上げることができるようになります。

回勅「救い主の母」で私は、マリアの信仰がどのようにしてキリスト信者の間に伝わっていったかについて述べました。「主の母と

の出会いを求めて、個人や地域内だけでなく往々にして国または大陸規模の人々を引きつける大きな聖地の持つ魅力によって、マリアの働きが広がっています。」(28番) このロレットでは、今述べたことがこの上なくびつたりと当てはまります。数知れぬ素朴な信者や列聖された聖人たちが、自分たちへの「お告げ」すなわち神が彼らのためにお立てになった生涯の計画を知らされ、そしてマリアの

# 家庭：祈りの学校

## 家庭が召命を育てる

誰もが特別な使命を持つ

主は預言者エレミアに、その使命は生まれる前からの神の永遠の計画であったことをお知らせになりました。「主の御言葉はこう私に告げられた、おまえを胎内につくるより先に、私はおまえを知っていた。母のふところから出るより先に、私はおまえを聖別し、国々の預言者と定めた。」(エレミア1・1・5)

預言者が語るように、一人ひとりが神のご計画に入っています。キリストによる特別の招きを見出すために、一人ひとりが祈りの中で神の声に注意深く耳を傾けねばなりません。また、人生の重大な出来事や、他の人の模範や知恵を

ように自らの決定的な「なれかし」(「ここにおります」を神に向かつて申し上げたのです。)

大聖レオは「教会の子らはキリストともに懐胎された」(説教集2: PL54, 213)と言い、「教会憲章」はマリアが「まことにキリストの成員の母である…なぜなら、マリアは教会のかしらの成員である信者が、教会の中に生まれるよう愛をもって協力したからである」(53番)と述べています。つ

通して、教会が祈りのうちに示す判断を通して、神の御旨を知ることが出来ます。

神の恩寵はさまざまな経路を通じて注がれますが、中でも家庭は、キリスト信者の召命をはぐくむ場として、特別の役割を担っています。まことにキリスト信者の各家庭は「キリストの学校」です。そこで子供は最初に神を知り、神を愛し、御言葉に従い、招きに応えることを学びます。「信仰と愛と敬神の精神に生かされた」(司祭の養成に関する教令、2番)家庭で、信仰の光が子供の命の中で輝き、召命の種が芽生え、実をつけ、大きくなります。神からの召命に応える皆さんに教会からの深い敬意を表明しま

まり、マリアの承諾はある意味で、私たちのためになされた承諾だったのです。教会のかしらをみごもったマリアは、まさしく私たちを「受け入れ」みごもった、客観的に見れば少なくともキリストの成員である者たちを「キリストと共に」みごもったことになりました。このように考えれば、ナザレトの聖なる家は、私たち自身も共に神秘的に懐胎された共通の故郷のように思えてきます。シオンを

す。今日の叙階式で間もなく司祭となられる方々のご両親に感謝いたします。ご両親が築かれた家庭で、この若い人々は神の愛の秘義を見出しました。皆さんの家庭がいつも神の愛の暖かさ喜びで満たされていますように。

### 祈りの家

皆さん、キリスト信者の召命、とりわけ司祭への召命がカトリックの家庭でどのように育つのか、具体的に考えてみましょう。まず第一に、家庭は祈りの学校であるということとです。いつでも、また人生にはつきものの困難や試練を迎える時にはなおさら、確信をもって神に立ち返らねばならない、という鋭敏な感覚が子供の心に育ちます。司祭になろうとしている人々にとって、これはとても大切なことです。一人の人間として、また共同体として折るよう

人々に教えなければならぬ司祭は、祈りの人、霊的に成熟した人

歌った詩篇の文句を私たちが口ずさむことができるのです。「その中でみな生まれたのだから。」(87・2)

最後の三番目の瞬間はみことばの託身、すなわち私たちの間に救いがやって来たことです。お告げの祈りではこの上なく美しい言葉で思い起される場面です。「しかして御言葉はひとりとなり給い、われらのうちに住み給えり。」信仰をもって恵みを受け入れたマリ

でなければならぬからです。次に、家庭は忠実と愛を教える学校であるということです。婚姻の秘跡を受けた夫婦が互いの忠実を貫き、結婚の誓いを全うし、子供を育てていく姿は、教会に対するキリストの不朽の忠実を思い起させる、すばらしいしるしです。

司祭はキリストへの奉獻のしるしとして独身を守り、教会への奉仕に忠実でなければなりません。司祭は神の呼びかけに対して生涯忠実であることの大切さをまず両親から学び、理解します。結婚の忠実を尊ぶ家庭では、司祭は自分の召命とそこから生じる要求を一層よく理解することができるでしょう。

両親と子供が愛と犠牲で結ばれていれば、家庭は従順と信頼の学校になります。人生の始めの頃に学んだこのような徳は、司祭の生活と職務にとって何よりも大切で、司祭は自分の意志を、福音のため、教会共同体の善のため、上

アはまことに神の母、教会の象徴となりました。実際、聖アンブロジオが書いてるように「信じる者は全て、神のみことばを懐胎し、生み出したのである…肉によつてと言うならキリストの母はただ一人だが、信仰によつてなら、神の御言葉を受け入れた瞬間に全ての人がキリストをみごもったと言える。」(Epositio evangelii secundum Lucam, II, 26; CSEL, 32, 4, p. 150) (…)(九三・八・十五)

長の決定と判断に快く従わせなければならぬからです。

最後に、家庭は慈悲の学校であるということです。司祭は秘跡の役割、なかなざく赦しの秘跡での靈魂とのこまやかで心のこもった出会いを通して、神の憐れみの分配者になります。愛情に満ちたキリスト信者の家庭に育つならば、両親から、また家族の生活の中で実践される慈悲の行為や互いに赦し合うことを通して、憐れみの意味を学ぶでしょう。私たちは憐れみを受けることによって、憐れみ深くなることを学ぶのではないのでしょうか。ちょうど私たちが「慈悲に富む」(エフエ2・4)神からキリストを通して赦しと新しい命を受けるように、私たちがこの恵みを人々に寛大に分け与えなければなりません。

キリストを告げ知らせる

今、叙階の秘跡にあずかる方々に申し上げます。

### 【新刊案内】

世の光イエズス・キリスト「カトリック教会のカテキズム」要約Q&A…定価二二〇〇円

千三〇〇円



# 説教・講話・書簡等の抄訳

一昨年聖座の認可を受け出版のはこびとなった「カトリック教会のカテキズム」をもとに書き下ろされた、問答形式でわかりやすい要理書です。従来の要理書では触れられることの少なかった現代的な問題(性倫理など)に明確な指針を示す、実践的なカテキズム。本邦初訳。お申し込みは精道教育促進協会まで。

## 司教は福音の伝達者

### 教会シリーズ 19

#### 司教は福音の伝達者

主における若い兄弟たち、聖パウロの言葉を何度も聞かれたことと思います。「私たちは自分のことを述べるのではなく、キリスト・イエズスが主であることを宣教する。私たちはイエズスのために、あなたたちの奴隷であるに過ぎない。」(IIコリント4・5)この言葉を皆さんの生活と使命の指針として心に刻んでください。「自分のことを述べるのではなく、キリスト・イエズスのことを！」キリストは主であり、私たちはキリストの取るに足らぬしもべです。

最後に聖パウロはこう言っています。「しかし私たちは、この宝を陶器の器の中に持っている。それはこの絶大な力が自分からでなく神から出ることを表すためである。」(同4・7)

キリストによって「あわれみを受けて」(同1)この奉仕をゆだねられたと悟る時、皆さん一人ひとりの心は深い謙遜で満たされるでしょう。全てのキリスト信者が罪と利己主義に死に、神が与えたもうた使命に謙遜に生きるよう招かれています。

何人の人が「神の奥義の管理者」(Iコリント4・1)になるでしょうか。使徒たちのように、神の御旨を自分の望みや目的の上におき、隣人、特に病気の人や貧しい人への奉仕に寛大に働くことを学んだと証明してください。(九〇・九)

#### 1

司教団の一員として、また委託された個々の教区の牧者である司教の使命について、第二バチカン公会議の教えを考察しましたが、今回は、そのうちの根本的なものについて考えてみましょう。第一は、権威をもって福音を宣べ伝える使命です。「司教の主要な務めの中でも、福音の宣教は特にすぐれている。」(教会憲章、25番)

神の言葉を宣べ伝えることは、使徒たちと同様、司教にゆだねられた第一の使命です。今日教会は人々の救いのため、また教会の社会・共同体組織を広め、確立するため、より一層熱心に福音を宣べ伝える必要はないことを自覚しています。聖パウロの言葉を思い出してください。「主のみ名を呼び求める全ての人は救われる」とある。それなら彼らは、まだ信じなかつた者をどうして呼び求められよう。まだ聞かなかつた者をどうして信じられよう。宣教する者がなければどうして聞けよう。遣わされなかつたらどうして宣教できよう。「よい便りをもたらす者の足は美しい」と書き記さ

れている。」(ローマ10・13)

だから、「司教は信仰の伝達者であり」神の民の信仰を強め、実りをもたらす者であると公会議は教えるのです。(教会憲章、25番参照)

#### 時代の要請に合った方法で教えを示す

#### 2

公會議は「伝達者」としての司教の第一の働きに関する責任を列挙しています。青少年にも大人にも宗教の教えを示すこと。啓示された真理、すなわちキリストの秘義をあますところなく宣べ伝えること。特に疑問や批判を受けている問題点についての教会の教えを人々に思い起させること、など。司教に関する教令によると、「司教は教える任務を果すに当って、キリストの福音を人々に告げなければならぬ。これは司教の主要な任務の中でも特にすぐれている。司教は人々を霊の力において信仰に招き、あるいは生きた信仰の中に固めなければならぬ。人々にキリストの秘義のすべて、すなわち、それらについての無知はキリストについての無知となる諸真理を教え、さらに神に栄光を

得るためのものとして、神から啓示された道を示さなければならぬ。」(教会における司教の司牧任務に関する教令、12番)しかし同時に、時代の要求に応じた方法で教えを示すように勧められています。「キリスト教の教理をのべるにあたっては、時代の要求に適応した方法、すなわち、人々が最も悩み苦しんでいる困難と問題に解答を与える方法によるべきであり、また、信者に教理を弁護し、宣布することを教えることによって、教理を擁護しなければならぬ。」(同、13番)

#### 3

信者は司教の教えを信仰のうちに尊敬をもって受け入れなければなりません。「ローマ教皇と交わりを保ちながら教える司教は、神的・カトリックの真理の証人として、全ての人から尊敬されるべきである。そして信徒は、自分たちの司教がキリストの名によって信仰と道徳に関して教えることを受け入れ、敬虔従順な心をもってそれに同意しなければならぬ。」(教会憲章、25番)

司教の教えは、ローマ教皇と一致してはじめて価値と拘束力を持つと公會議は述べています。一人ひとりの司教が自分に固有の才能をもって主の教えを宣べ伝えますが、主が教会にお委ねになつた教えを伝えるわけですから、いつも必ず教会の頭に一致していなければなりません。

# 不変の教え

**4** 司教たちが信仰や道徳を普遍的・決定的に教えるとき、司教の教導権は不謬の権威を持ちます。「おのおのの司教が不謬の特権を持っているのではない。しかし、彼らが全世界に散在しているときも、相互の間とペトロの後継者との交わりのつながりを保持しつつ、信仰と道徳に関する事柄を真正の権威を用いて教え、一定の教説を決定的なものとして認めるべきである」と一致して述べる時には、彼らはキリストの教えを不謬に宣言する。このことは、彼らが公会議に集まり、その中で全教会のために信仰と道徳の師および判定者の役目を果し、彼

らの決定に信仰の従順による同意が要求される時にはなおいっそう、明らかである。」(教会憲章、25番)

**5** 司教団の頭であるローマ教皇は不謬の特権を持っていますが、これについては後に述べることにして、公会議のテキストの先を読んでみましょう。「教会に約束された不謬性は、司教団がペトロの後継者と共に最高の教職を行使するとき、司教団の中にも存在する。これらの決定に教会の同意が欠けることはあり得ない。なぜならそれは同じ聖霊の働きによるものであり、この働きによってキリストの群れ全体が信仰の一

致のうちに保たれ、前進するからである。」(教会憲章、25番)

司教団が示す教えが真理であることを保証する聖霊は、その恩寵を通して教会を信仰における一致に導きます。信仰における一致は、教会の魂である聖霊の働きによるのです。

公会議はさらに続けて教えています。「神なる贖い主は、自分の教会が信仰と道徳に関する教義の決定に際して不謬であることを望んだが、この不謬性は、神の啓示の遺産と同じ広がりを持つ。ローマ教皇、あるいは教皇と共に司教団が教えを決定するとき、これらは、全ての人がそれに一致し

従わなければならない啓示そのものに従って、その教えを宣言する。啓示は書き物または伝承の形をもって、司教の正当な継承を通して、特にローマ教皇自身の配慮によって欠けることなく伝えられ、真理の霊の照らしのもとに教会の中で大切に保たれ、忠実に説かれていく。」(教会憲章、25番)

全ての司教は信仰の遺産を守るべき

**6** 最後に公会議は勧めます。「信仰の遺産は大切に守られ、忠実に説明されなければならない。」(教会憲章、25番)

ですから、司教団の一人ひとりがローマ教皇との一致のうちに、キリストから教会にゆだねられた信仰の遺産を絶え間なく忠実に守っていく責任を担っています。「委ねられたものを守れ」と、聖パウロはエフェゾの教会の司牧をまかせた弟子のティモテオに勧めました。(1ティモテオ6・20)

カトリック教会の司教として私たちはこの責任を自覚しなければなりません。私たちがこの「遺産」を忠実に守るなら、神の民の信仰を完全な形で保つことができ、それを世界に、そして来たるべき世代に広めることができるのです。(九二・十一・四)

## 教皇様の動き

(九四・二〜三月)

●2月2日付けで国際家族年のための家族への手紙を公にされた。

●2・11 自発教令「ヴィテ・ミステリウム」でプロ・ライフの教皇庁アカデミーを設置された。

●水曜日の一般謁見でのお話。「洗礼と堅信の秘跡の力によって、信徒は使徒職をする義務がある。」「信徒は聖職者の活動に参加することもできるが、信徒が牧者になるのではない。」

●3・4 広報評議会メンバーに。「マス・メディアが教会の道徳性に害を与えるようなことを避けるならば、家庭生活を豊かにす

ることができる。」

●3・5 オソドックス教会の神学生に。「あなたが二つの伝統と私たちの教会とのつながりになってくださるよう。」

第14回国際カトリック教育者の集いでのお話。「宗教・人種を問わず全ての若者に、彼らの人間としての尊厳にふさわしい教育を与えなければならぬ。」

●3・6 アフリカの臨時シノドス。アフリカの重要人物テルトゥリアヌス、聖アウグスチヌス、聖チプリアヌスにも触れ、「キリストはアフリカに呼びかけておられ

る」と話された。

●3・9 一般謁見で。「聖霊はある人々に特別の賜をお恵みになるが、日常の仕事で果す信徒に多くの隠れた賜をお与えになる。」

●3・11 バングラデシュの司教たちと会見され、「福音を受け入れる余地のある地域では、熱意と創造性が宣教を励ます大きな力となるでしょう。」

従軍司教に向けて。「軍役にづく人々にも、あらゆる面で平和の福音に仕えるしもべとなるよう勧めてください。」また、国際平和のために軍隊が果たすべき重要な役割についても話された。

●3・13 聖水曜日に向けて、司祭たちへの手紙。「皆さんの召し出しは神によるものですが、両親も大きな役割を担っています。」

●3・16 一般謁見で、信徒は世に対してキリストを証し、宣言する使命を持つと話された。

●3・17 ラトビアの大統領を迎えて。「教会の社会教説からもわかるように、社会・経済・政治上の諸問題の鍵は福音の中に見出すことができるのです。」

●3・18 人口問題についてのメッセージを出された。その要点は以下の通り。「全ての人が尊厳を有する。人命は受胎から自然の死に至るまで神聖なものである。」「開発の名に偽る開発とは、人間の真の利益に基かねばならない。」「人口問題を生む権利や女性の権利と呼ぶことは、問題のすり替えである。」「子供の数は夫婦の自由な責任で決めるべきであり、政

府が強制してはならない。」「母性を尊重し、社会における母親の役割を評価すべきである。」「若者は、自他の尊厳と自制を守る性倫理に目を向けねばならない。」

●3・20 お告げの祈りの際のお話。「飢餓、戦争、民族対立に悩むアフリカの多くの地域で、福音を日々の生活にもたらすことは急務であると思う。」

※先月4月号第3頁の記事「教皇様の動き」の中に不適切な表現がありました。お詫びして訂正致します。●2・17日の項「主は悪魔、それゆえ悪は追いつけないと言われた。」を「悪魔、それゆえ悪は追いつけない」と主は言われた。」と訂正下さい。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講義等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九百円 送料七百円 干部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393